『ラヴ・メディシン』における『白鯨』の役割

—— ネクターの生き延びをめぐって ——

大　島　由起子*

1．序文

『白鯨』（*Moby-Dick* 1851）は、白人作家ハーマン・メルヴィル（Herman Melville 1819-91）が 19 世紀中葉のアメリカン・ルネッサンス期に書いたが、ネイティヴ・アメリカン・ルネッサンス期以降の先住民作家に注目されることが多い作品である（Cox 83-89）。『白鯨』に限らず、北米先住民の作家が白人作家の作品を読むときには、独特の読み方をする傾向がある。

批評家ジェームズ・H・コックスが指摘するように、白人は、文学作品において、様々に先住民を表象してきた。また、白人が描いた先住民について、先住民がいかに認識しているかを研究することができる作品も夥しくある。しかし、この研究はほとんどなされてきていない。

本論文執筆者は、先住民作家ルイス・オーエンズの小説『慧眼』（*The Sharpest Sight* 1991）を『白鯨』との関連で論じたことがある。オーエンズは、『白鯨』に対して愛憎を抱き続けつつも、先住民ならではの慧眼を示したが、オーエンズの『白鯨』評には、先住民としてのこだわりゆえに死角となった観点がある（大島）。オーエンズの『白鯨』評に、本論文執筆者が指摘した、死角となった観点を加えると、先住民作家ルイーズ・アードリック（Louise

* 福岡大学人文学部教授

Erdrich 1954- ）を解釈できるようになると考えられる。アードリックは、代表作『ラヴ・メディシン』（*Love Medicine* 1984）では、文学作品としては『白鯨』のみに言及しているのである。[1]

アードリックは、フランスやドイツという白人の血を汲む、アメリカの中西部北部のオジブエ族（別名チッペワ族）である。ダートマス大学から文学士を取得し、ジョンズ・ホプキンズ大学から創作分野で修士号を取得している。先住民作家の作品は先住民以外から注目されることはあまりなかったが、『ラヴ・メディシン』は、彼女の第一作の小説であるにもかかわらず、出版されたとたんに注目を集め、1984 年の全米批評家協会賞を受賞した。この作品で、彼女はそれまで深刻だった先住民文学に悲喜劇性のユーモアをもたらし、新しい声として文壇に登場し、先住民以外の一般読者を獲得することに成功したのである（Ruppert 179）。[2]

本論文では、先住民作家アードリックの代表作『ラヴ・メディシン』において、『白鯨』がどのように使われているかについて検討し、『ラヴ・メディシン』の主人公の一人である先住民ネクターによる、『白鯨』とその主要登場人物の解釈を、読み解く。この研究は『ラヴ・メディシン』の悲喜劇性を理解するための重要な一助となるものである。

２．先住民ネクターという人物

2.1. 皮肉な『白鯨』との出会い

『ラヴ・メディシン』は 19 世紀末から 60 年にわたる 3 世代の家族について書かれた大河小説である。タートル・マウンテン・オジブエ族の架空の保留地を舞台としているが、そこはアメリカ中西部の大平原の北部に位置するノースダコタ州にあることになっている。[3]

『ラヴ・メディシン』は語り手が頻繁に代わるポリフォニー形式で語られる。男女三人ずつ交替で自分たちの歴史を一人称で語り、さらに、数章では三人称

の語り手が語る。本稿で注目するネクター・キャシュポーは、複数の一人称の語り手かつ主人公の中の一人である。彼は純血の先住民男性であり、家系ゆえに部族会議の議長をしている。だが、欠点が多い人物でもある。彼は時々『白鯨』を使いながら自己分析を行うのである。

ネクターは、寄宿学校を出てしばらく放浪した後に保留地に帰郷し、狩りをしたり雑用をしたりして、とりとめもなく暮らしている。彼は、異性にも同性にももてるものだから、さして考えもしないで、保留地でも多くの性的関係を持つ。そんなネクターだが、帰郷後は、『白鯨』のことを考え続けている。

ネクターの『白鯨』との出会いは、ひとえに寄宿学校での一教師ゆえだった。ネクターもご多分に漏れず寄宿学校にやられたのである。小説の寄宿学校でも実際の寄宿学校でも、先住民を親元から離して生活させ、先住民らしさを劣ったものだとして否定し、英語を強要した。その寄宿高校では、白人の神父の教員が、四年間ずっと『白鯨』一冊のみを教えたのである。このことは、寄宿舎でずさんな教育が許されていたことを窺わせるに充分である。

『白鯨』についてネクターは語る。——「俺はその本を知り尽くしている。学校から一冊くすねてスーツケースに入れて、故郷に持ち帰ったくらいさ」(124)。ネクターは決して文学好きではない。『白鯨』は彼が生涯で読了した唯一の文学作品であるにすぎない。ただし、教師に強要されての読書だったにせよ、ネクターの心は捕鯨船を舞台としている『白鯨』に捕えられ、彼はその作品のことばかり考えるほどになる。

2.2. 滅びゆく人種の表象

ここでは、ネクターが寄宿学校を出て、放浪していた青年期に遡及する。その頃、ネクターはハリウッドで主役級の役についた。何しろ当時の彼はすてきな外見だったのである。しかし、手で胸を押さえながら馬から落ちろ、などという命令は、「映画においては、死だけが、インディアンの役回りだ」(123)

と悟らせるものであり、ネクターには不快極まりなかった。彼は立腹して俳優の仕事を辞めてしまった。

その後、ネクターは職を転々として、なかなか保留地に戻ろうとしなかった。ある時、中西部のカンザスの街を歩いていると、金持ちの白人老女から声をかけられる。彼女は画家で、ネクターに自分の絵のモデルを務めてほしいと言う。始めは躊躇したネクターだが、結局、その仕事を引き受ける。スタジオに着くと、彼は服を脱ぐように命じられる。断ったものの、モデル料を吊り上げてきたので引き受けて、「おしめ」だけの姿になり、言われたとおりに立ったままのポーズをとる。

後日ネクターは、州都庁を飾ることになる「勇者の飛び込み」(*Plunge of the Brave*)と題された絵画の完成作を見せられて、驚愕する。彼が想像していた作品からは程遠かったのである。そこには、眼下の岩だらけの峡谷の川に、全裸で仰向けに飛び降りるネクターが描かれていた。自殺である。この絵画のタイトル「勇者の飛び込み」が意味するように、臆病者の先住民が自殺をするのではなく、戦士のような先住民「勇者（the Brave)」が、滅びゆく人種を表象するかのように、自から果てる姿が描かれていたのである。しかもこれは州都庁を飾ることになる絵画なので、公的な意味合いを帯びることになる。すなわち、州都庁に飾られたその絵は、カンザス州ひいてはアメリカ合衆国において、先住民が自ら滅びゆくことを表す表象となるのである。その先住民自滅の表象は、白人社会に同化しないならば先住民は滅びて当然であるし、それが彼らの意思だと、訴えているようである。

ネクターは、ハリウッド映画においてのみならず、州庁舎を飾る絵画においても、自分が滅びゆく人種の代表にされたことを悟る。彼にとっては不本意極まりないことだった。彼はこう皮肉る。――「カスターの言葉を覚えているか。良いインディアンは死んだインディアンだけだってな。俺の白人との経験に照らして、その引用にこう付け加えてやろうじゃないか。面白いインディア

ンは、死んだインディアンか、または、馬からのけぞり落ちて死にかけているインディアンだけだってな」(124)。[4] 白人が主流の社会は先住民の滅びにしか興味がない、とネクターは結論しているのである。

アメリカ合衆国には、北米先住民を滅びゆく人種だとみなす表象があった(Dippie)。むろん、白人にとっては都合がよく、先住民にとってみれば憤怒の極みの表象である。ネクターは、そうした表象に絡めとられそうになっても、抵抗する。映画俳優や絵画モデルの体験は、不快ではあったが、ネクターの精神を強くした。若きネクターには、未来がある。彼は、保留地に戻ってからは逆巻く水が押し寄せようが生き抜いてやる、と密かに心に誓う。しかし、その誓いは時の経過とともに摩滅していくことになる。

2.3. イシュメールへの憧憬

帰郷後のネクターは、先述のように、『白鯨』のことを思い出す。イシュメールが『白鯨』のエピローグで棺桶ブイで生き延びたことは、「俺が金持ち女の絵から抜け出たこと」さながらだと、ネクターは感じる。そして、次のようにイシュメールに自分を重ねる。（このくだりにおける「巨大な白い怪物」とは、『白鯨』に出てくる巨大抹香鯨モービ・ディックを指す。）

> 「俺のことはイシュメールと呼んでくれ。」俺はときどき、そう独り言を言っていた。イシュメールが、巨大な白い怪物にやられずに生き延びたからさ。俺様が金持ちのレディーの絵から逃げたように、だ。イシュメールが水に自分の棺桶を海面まで押し上げさせたからだ。俺も、イシュメールのように気楽にやって乗り切ってきたからだ。なのに、川は、まだ俺を放してくれてなかったんだな。俺は静かですてきな所を漂い流れているのだと思いこんでたが、どっこい、どこかで川は分岐していたってわけだ。(125)

ネクターには、「俺のことはイシュメールと呼んでくれ」という、『白鯨』の有名な冒頭文を独り言で言う癖がある。ネクターは、イシュメールが、白い巨大怪物のようなモービ・ディックに殺されなかった唯一の乗組員であるので、自分もイシュメールにあやかろうというのである。白人世界という巨大な白き怪物に破滅させられることなく、何とか人生を生き延びたいという切望が、ネクターの心にあるのだ。自分をイシュメールと同一視する口癖は、その祈りの強さだと解せる。

人種においても人生においても主流を外れたネクターが自分をイシュメールに重ねたがるのは、旧約聖書のイシュメール（旧約聖書ではイシマエル）がユダヤ・キリスト教において主流ではなく傍系の人物であるからでもあろう。——なお、『白鯨』の語り手のイシュメールという名前は、おそらく彼の本名ではなく、その語り手が、旧約聖書においてアブラハムの家系から出されて傍系を作らされるイシュメールを意識しての自称だと推測できる。また、ネクターは、例の絵画に描かれた、逆巻く水に飛び込む自分の姿を拒絶して、イシュメールが大渦を生き延びる姿に自らを重ねる。彼は、そうすることによって、滅びゆく先住民という紋切り型の否定的なイメージから逃れうる、と思いたいのであろう。

先住民ネクターが『白鯨』のイシュメールに憧れるのは、傍系であるイシュメールが白い怪物がもたらす災禍を逃れたからである。先住民が意味を認める白人文学とは、その作品が生き延びという一大課題ゆえの深淵で広大な世界を持つときであろう。その作品で、先住民、ないしは先住民的な登場人物が生き延びれば、意義深いのである。

『白鯨』は確かに、生き延びという一大課題ゆえの深淵で広大な世界を持つ。『白鯨』では、前回の捕鯨で巨鯨モービ・ディックとの格闘で脚を根元から食いちぎられたエイハブ船長が、復讐しようとして世界の海を経巡り、この一頭の鯨を追う。エイハブは、ほぼ世界一周をして太平洋でようやくモービ・

ディックに出会うも、鯨に捕鯨船を沈められ、彼も落命する。エイハブは、乗組員を白鯨への復讐に巻き込み、イシュメール以外の全乗組員の命を奪う結果をもたらす。

その生き残りという主題は、『ラヴ・メディシン』においては、繰り返し水のイメージを伴って表わされる。[5] この表現にも、海を舞台とした『白鯨』との関連がある。ネクターには、絵画モデルとしての不快な体験から、水のイメージが付きまとうようになる。上記引用部にあるように、ネクターは、川が自分を離してくれず、分岐点では急流の方に流された、と表わしているのであるが、このように、水に捕まったままというイメージで、人生における失敗の言い訳をしている。

ネクターがどう生き延びようとしたかといえば、正面きって白人世界に抗うのではなく、静かにかわそうというのである。その点で、彼の流儀は『白鯨』のイシュメールの流儀と重なる。ネクターは、「イシュメールのように気楽にやって乗り切ってきたから」と言っているからには、イシュメールの気楽さに惹かれているに相違ない。このようにネクターは、力を抜いて流れに抗うことなく、うまく生き延びようという方針のようである。

しかしこの流儀には、ネクターの努力不足やいい加減さを察知することもできる。ネクターの現実は、岸に着けないままに流され続けただけである。ネクターは、状況把握ができておらず、川の分岐点、すなわち人生の分岐点が分からなかったと言っているのである。批評家ロリーナ・L・ストーキーが指摘するように、この分岐点とは、ルル・ラマルティーヌという初恋の恋人がいたにもかかわらず、ネクターが衝動的にマリー・ラザレと結婚してしまったことを指すと考えてよい（Stookey 43）。すなわち、ネクターは、自分の人生の分岐点が分からなかったふりをして、責任逃れをしているのであろう。

若い頃のネクターは自惚れており、自分のことを次のように語っていた。——「俺はかっこよくて、背が高く、スリムで、お腹も垂れてない。どんな女

の子だって選び放題ってわけさ」(61－62)。しかし、ネクターが人生の分岐点でしたことは、「このあたりじゃ、人は俺のことを、まるで鞭みたいに頭が切れるって言うが、今回は頭が良すぎて、自分のためにならないことをしでかしちまった」(62) という失態であった。ネクターは道化的に描かれているが、全てネクターの言うとおり失敗だったのである。

ネクターと二人の女性との三角関係は、『ラヴ・メディシン』のひとつの中心となっている。ネクターは長くルルの恋人で、彼女に夢中だった。ルルのことを想うと胸が締め付けられるほどだったが、彼が人生の分岐点で、あることを「しでかし」たことを機に、二人の人生が狂い始める。

ネクターは、修道院から必死に逃走している最中の幼馴染の尼僧マリーと偶然に出会う。マリーのいた修道院は、ネクターがいた寄宿舎のように先住民性を抹殺する場所である（市川 223－36)。ネクターは、出会ったマリーの腕をとると、急に、しばらく会っていなかった彼女のことを女性だと意識して、ルルという恋人がいながら、マリーとロマンチックな関係になり、しかも即、結婚に至るのである。まるで支離滅裂である。この展開について、ネクターはのちに頭のなかで次のように整理する。ルルが自分を求めて腕を伸ばしてきたものだから、その積極性に自分はしり込みをしてしまい、マリーとの結婚に逃げこんだのだったと（128)。

後年、ネクターは、自分のマリーとの 17 年の結婚生活、そのうち 5 年になるルルとの不倫関係、そうした来し方を、次のように回顧する。

> 時があまりに速く流れてしまったので、ざっと思い出すだけで、いまだって驚いてしまう。橋の下を流れる大水ってやつだったのさ。急流だったのかもしれない。あまりにさっと俺をさらった渦だったもんで、俺はどちらの岸も見る余裕もなく、ただもう次に来るものを見ようとするだけで必死だった。(127)

ネクターは自分のことを、堰き止めようのない洪水のようで、どうしようもなかった、と言っているのである。制御不可能な水のイメージである。このようにネクターは、気が付くと渦に呑まれていたという。逆巻くというのはここでは川の渦（swirl）のことだが、『白鯨』では捕鯨船ピーコッド号が没する大渦（vortex）のことである。

別の場面でも、ネクターは自分のことを水に喩えている。彼が、ルルとの逢引で彼女の寝室までよじ登るときに、その様子を、自分は若者の体に変身したのであり、重力に逆らってでも動く水だと表す。――「俺は動いた。魔力の水なのさ。俺は、急流に当たられて陥没穴だらけだった。俺はルルの寝室の窓まで登っていった。俺は、橋をふんばらせるような洪水だった。何かに収めようったって無理な話さ」(134)。要するに、ルルとの関係では、喪失した若さを超人的に取り戻せるかのような幻想に浸れるのである。ネクターは、捕えどころのない水のような自分をルルは抱きしめることができる、と驚いたり、ときには、ルル自身も水になって二人一緒に奔流となり、さらにはベッドで魚になるのだ、と惚気たりする。[7]

こうしたネクターが溺死を恐れている理由を解するには、彼の部族オジブエ族のことを知らなくてはならない。ルルが言うように、溺死者はあの世に逝けず、この世に留まって生きている者に取り憑くことが多いから、溺死はオジブエ族にとって最悪の死に方である。批評家ジェーズ・H・コックスは、ネクターについて次のように分析している。

> 具体的には、ネクター・キャシュポーは、先住民以外のストーリーテリングの伝統で、溺死することを拒む。その伝統というものは、風景からも、南北アメリカの歴史からも、彼が存在しないように画策する。ネクターは、固唾を呑んで流れに身を任せて、自分をうまく岸に運ばせるつもりだ。(Cox 83)

ここでいう先住民以外のストーリーテリングとは、白人による先住民表象のことを意味している。本来の先住民が、アメリカの歴史からは存在しなくなるということである。その白人の表象を内面化して溺死することを、ネクターは拒む。ネクターが俳優やモデルをした時のような不愉快な体験は、ネクターに限ったことではなく、広くは、南北アメリカにおける全ての先住の民のことでもある。彼の体験は、先住民が滅びゆく人種として風景からも南北アメリカの歴史からも抹殺されてきたことを、意味するのである。

ネクターは、「俺も、イシュメールのように気楽にやって乗り切ってきたからだ」(125)。と考えていたが、波風立てずに何とか生き延びるというところにのみに注目するから、自分のことをイシュメールと同じだと考えているのだろう。しかし、ネクターは、マリーとの偶然の再会と、結婚の後12年してルルと寄りを戻したことが彼の人生の分岐点となり、その後5年というもの、ネクターはイシュメールの生き残り策からずれて、急流に呑まれていくのである。

以上、本節では、『ラヴ・メディシン』におけるネクターの生き残りと『白鯨』におけるイシュメールの生き残りを比較した。ネクターが、滅びゆく人種という表象に抗おうとしながらも、呑気に、あるいは衝動に身を任せて生きてきた付けがまわり、彼が時の経過とともに、理想としていたイシュメールの生き残り策からずれていく経緯を追った。表現に関しては、ネクターが自分の人生を水に関連したイメージで述べていることを示し、その水に関連した表現を解釈した。

3．エイハブ——火事と聖エルモの火

既に述べたように、ネクターは、長く付き合ってきたルルではなく再会したマリーと衝動的に結婚する。それが人生の分岐点となり、その後のネクターは、徐々に急流に流されていき、精神的に混乱して愛人ルルの家を火事にして

しまい、破滅に至るのである。本章では、『白鯨』との関連を捉えながら、破滅に至る過程とその場面を検証する。

保留地に帰郷したネクターは、親から受け継いで部族会議の議長になる。議長は共同体の中心人物であるが、そうだからといって、大した収入はなく、さして感謝もされない。保留地というものは、インディアン管理局の管轄下にあり、ずさんに管理されていることが多い。あるときネクターは、保留地で、余った 17 トンものバターを運ぶ仕事をおおせつかる。そのためにルルのクーラー付きの自家用車を 2 時間ほど貸してもらう。

ネクターは、マリーと結婚したのでルルとは別れていたが、その一日がきっかけで、ルルとよりを戻すことになる。ネクターは勝手にマリーと結婚したのだから、ルルと二人きりでいると気まずい。それが妙な展開となる。

バターを運び終えて、二人でインディアン保護事務所に向かおうとしていたときのことだった。ルルは、高台から風景を眺めたいと言い出し、車を高台に向ける。車を停めて下界の風景を眺める。「俺たちは、二人きりでこんな所にいるべきじゃあない」とネクターは殊勝なことを言うが、彼女は景色を楽しむ。ネクターは衝動的に、ルルに「俺を許してくれるかい」と謝ってしまう。「かもね。でも私は元の私じゃないわよ」とルルが言うので、「俺も元の俺じゃあないさ」と返す。そういうネクターを彼女が見たときに、「何か素晴らしきことが起こり、彼女の表情は、花がぱっと開くように開き、雲間から月が出たようになった。微笑んでくれたのだ」(132)。

この後、ネクターは、幼馴染の妻マリーと元恋人の愛人ルルとの三角関係を、破滅までの五年間続けることになる。部族会議議長として難題を抱えたネクターには、愛人ルルは心地良かったのだろう。当時のオジブエ族は難しい状況に置かれていた。ネクターは、部族会議議長として、州知事にも会えば首都ワシントン詣でもする。

ある時、部族の土地に工場を建てる計画が政府から持ち上がる。財政難の部

族としては呑まざるをえず、議長であるネクターは、その土地に勝手に住んでいたルルに立ち退きを命じなくてはならない。この土地問題は、三角関係のただ中にあるネクターをますます混乱させることになる。

ネクターは、またしても衝動的にルルが欲しくなり彼女の家に行くが、留守であった。いつもは忍び込んでいたが、今回は初めて正面玄関をノックする。――「俺はもう怖いくらいだった。俺の中で、何かがはじけそうになっている」(142)。ネクターは、ポーチでルルの帰宅をいつまでも待つつもりでいた。彼は、ルルに宛てた手紙を持っていた。ネクターは、自分が妻子を捨てることを知って家族がパニックになっている場面を、ありありと想像してしまう。ネクターは一本目の煙草を丸めて作って、喫う。そのことを忘れて、せかせかと二本目に火をつける。ルル宛ての手紙を丸めていたが、それに煙草を投げつける。ルルや妻子のことはもう考えたくないと感じているうちに、ふとまた、『白鯨』のことを考えている。気がつくと手紙が燃えているのだが、ネクターはそれを興味深く眺めるだけである。そうやって放心状態のまま、ルルの家を火事にしてしまう。

この場面における『白鯨』への言及個所を見ておこう。

> 俺は『白鯨』に出て来る狂った船長のことを思い出した。彼の脚がいかに白鯨に食いちぎられたかを。俺は間違っていたのだろう。イシュメールについてのことさ。今、俺は、自分の中に、その船長のしるしを見るからだ。俺は、かがんでブリキ缶を拾って、平らに潰す。なんの理由もなしにさ！ほんのちょっとしてから俺は、ルルの家の壁を拳が痛くなるまでバンバン叩く。俺は両の手で頭を抱える。大声でルルに言ってやるのさ、さっさと戻って来いって。戻って来なけりゃ、何をしでかすか自分でもわからなくなってるんだってさ。(143)

ここで自己制御できなくなりそうな、暴力的で破壊的になりそうなネクターは、そうした自分と重ねる形で、『白鯨』のエイハブ船長がいかに鯨に脚をとられたかについて考えている。そして、かつて自分をイシュメールに重ねていたことは間違っていたと、苦く認識するのである。先述のように、青年のネクターはイシュメールのように生き抜いてやるという気概であったが、そうはできなかった。イシュメールと同一視どころか、今回のネクターは、自分の中ではエイハブ的なものが支配的になってしまったことを悟っているのだ。自分が、生き延びを代表するイシュメールではなく、破滅を代表するエイハブになってしまったと、慄然としているのである。

ネクターは、自分がエイハブのように自滅へと向かうだけの偏執狂と化しているのかと恐れているのだが、両作品を比較して、果たしてネクター本人が思うほどに、彼はエイハブと類似しているのかという意味では、ネクターはエイハブに到底及ばない。ネクターには、そもそもエイハブのような決意の固さがない。ただ欲望のままに行動する。つまりは俗物にすぎない。

批評家トマス・マッチーは、ネクターがルルの家を火事にしてしまう場面は、『白鯨』でのエイハブ船長と関連する火を踏まえていると喝破している。――「ネクターが誤って、愛するルルの家を火事にしてしまう場面は、『白鯨』でエイハブが聖エルモの火と対決する壮大なる場面についての、卑小なパロディーとも読める。」（Matchie 24）[7] マッチーはこのように、エイハブが聖エルモの火と対決する場面の壮大さに比して、ネクターが引き起こす火事の場面は卑小であり、その落差ゆえに『白鯨』のパロディーなのだという。

『白鯨』と重なるのは、『白鯨』第 119 章「蝋燭」である。マッチーは、火という共通項に着目して、『白鯨』の「蝋燭」の章のことを論じているのである。ただ、そう見事に両作品の火の意味が重なるというわけではない。相違は、第一に、エイハブの場合、自らがつけた火ではない。聖エルモの火は、自然界で稀ではあるが現実に起こる現象であった。第二に、エイハブは火と対峙してお

り、その場面は確固たるメッセージを持っている。しかし、ネクターの場合は、ネクターの精神的混乱による過失の火災にすぎず、悲喜劇性を帯びているといえる。

以上、『白鯨』との重なりとして、『ラヴ・メディシン』においてネクターが起こした火事の意味について検討した。ネクターは、自分がイシュメールのように生き延びるどころか、エイハブのように破滅的な人間になったと痛感する。ネクターは、イシュメールという理想からは遥かに遠くなってしまったのであるが、かといってエイハブを肯定的に受け入れる度量もない。彼にはエイハブの壮大さはない。卑小なネクターは、エイハブのパロディーでしかないのである。

4．ネクターの死

本小説『ラヴ・メディシン』の作品名は、『愛の妙薬』とでも訳せそうである。[8] 『ラヴ・メディシン』には、「ラヴ・メディシン」と題された章がある。この章の一人称の語りはリプシャで、彼が、祖父母のネクターとルルに仲良くしてほしいという願いから、語る。リプシャは、ネクターと愛人ルルの間にできた子の子であり、リプシャにとっては、ネクターとルルは祖父母なのである。リプシャは、ネクターが中年だった頃は、ネクターを英雄視していたが、そのリプシャにすら、最近のネクターはみじめに老いて見える。

次は、ネクターとルルが愛の妙薬について交わす会話である。

「リプシャね、そんなの、聞いたことがないわ」と彼女［ルル］は言った。
「実はさ、薬みたいなもんなんだ」
「何に効くの？」
「愛さ」
「まあ、リプシャったら。そんなの、聞いたことないわよ」一瞬して、彼

女は言った。(247)

この会話は、食事中の楽しい会話のようにあっけらかんとしており、ユーモアさえ感じさせる。

作品全体として『ラヴ・メディシン』は、ネクターの堕落や不倫に対して厳しくはない。むしろ、文化崩壊や、アメリカ合衆国が先住民に対してとったターミネーション政策という困難な時期に、能力もないのに部族会議の議長にされた気の毒な人物として、ネクターは描かれている。ましてや、「ラヴ・メディシン」の章では、愛人ルル側の、ネクターに好意的な彼の孫リプシャが語るのだから、ネクターは肯定的に扱われるのである。

遂に、ネクターは、リプシャとルルから熱心に勧められて、惚れ薬として七面鳥の心臓を食べる。しかし、その心臓を喉に詰まらせて死んでしまうのである。これは意外な無念の死という他ない。あっけない事故死とはいえ、愛に殉じたようにすら読めるのである。作品全体は、悲劇の中に喜劇がある、あるいは喜劇の中に悲劇が潜むという悲喜劇であるのだが、この章は、卑小なネクターの人生と合わせて読む読者には、アイロニーの効いた喜劇性が強く感じられるであろう。

批評家マッチーは、ネクターが愛の妙薬である七面鳥の心臓で窒息死する場面は、「エイハブがようやく白鯨に銛を打った際に短艇の索縄で絞首刑のように死ぬ場面のパロディーだと読める。」(Matchie 24) と喝破している。

このパロディー説を本論文執筆者の見方で検証する。『白鯨』では、ようやく念願叶って白鯨に銛を打ち込んだエイハブであったが、その銛に繋がっているロープが首に巻きついて、彼は短艇から飛ぶようにして消える。そして白鯨の体に刺さった銛と短艇を結ぶロープに絡められたまま死んだのである。このように、エイハブの死も意外な無念の死である。両作品の死の場面には、悲劇と喜劇という大きな違いがある。エイハブの死は悲劇的であり、ネクターの死

は喜劇色が濃い。マッチー流に言うならば、喜劇的なネクターの死は、悲劇的なエイハブの死のパロディーであるというべきなのだろう。

5．結論

本論文は、先住民作家アードリック作の『ラヴ・メディシン』において白人作家メルヴィルの『白鯨』がどのように用いられているかを分析し、『ラヴ・メディシン』が主要人物ネクターを介して『白鯨』を下敷きにしていることを、明らかにした。このことによって、『ラヴ・メディシン』に内在する悲喜劇性のユーモアを理解することを可能にした。

ネクターは、寄宿学校で『白鯨』を執拗に読まされる形で『白鯨』と出会ったのだが、『白鯨』は、ネクターが唯一読了した本であり、ネクターにとっては、その後に重要なものとなる。ネクターは人生の節目で『白鯨』を思い出すのである。

本論文の第２章で述べたように、ネクターは、保留地の外で俳優やモデルの仕事をする過程で、主流の白人社会は先住民を滅びゆく人種として捉えていると、痛感させられるのである。そして、ネクターは『白鯨』のイシュメールの生き延び策を憧憬し、その気持ちを、水を伴うイメージで語る。ネクターは、長く付き合ってきた初恋のルルではなく、再会したばかりのマリーと衝動的に結婚することで、人生の分岐点で急流に流されていく。ネクターは、マリーとの結婚後に一旦はルルと別れていたが、ルルと寄りを戻して三角関係を続ける。この三角関係についても、ネクターは水を伴うイメージで語る。

第３章で示したように、ネクターと『白鯨』のエイハブとの関連も『ラヴ・メディシン』には盛り込まれている。ネクターは、部族議長として愛人のルルに立ち退きを命じなくてはならない立場ゆえに、精神的に混乱する。そして、ルルの家を火事にしてしまう。その時、ネクターは、自分がイシュメールのように生き延びるどころか、エイハブのような破滅的な人間になったと痛感

する。しかし、エイハブのパロディーでしかない卑小なネクターには、エイハブの壮大さはない。この破滅の場面は火のイメージである。水のイメージにしろ、火のイメージにしろ、ネクターは、これらのイメージと共に、自分は人生の失敗者だと認識する。極めつけは喜劇的ともいえる彼の死に方である。

第4章で述べたように、『ラヴ・メディシン』には、その名も「ラヴ・メディシン」と題された章がある。老いたネクターは、惚れ薬として七面鳥の心臓を食べて、それを喉に詰まらせて死んでしまう。作品全体は悲喜劇であるのだが、この章には、アイロニーの効いた喜劇性が強く出ている。ネクターの死は意外な無念の死である。『白鯨』のエイハブの死も意外な無念の死である。しかし、両作品の死の場面には、悲劇と喜劇という大きな違いがある。喜劇的なネクターの死は、悲劇的なエイハブの死のパロディーであるというべきなのだろう。

白人が描いた先住民について、先住民がいかに認識しているかを研究することができる作品は多い。先住民が白人文学の何に興味をそそられたり惹かれたりするのか、また、何に反発をするのかについては、広く研究していくべきである。先住民からの意見表明に対して応答責任があると言ってもよい。しかし、この研究はほとんどなされてきていない。本稿を締めくくるにあたり、red reading を提唱したい。

注

1．ハーサ・D・スイート・ウォンとのインタヴューでアードリックは、強く影響を受けた白人作家として、アメリカではウィリアム・フォークナー（アードリックが描く、タートル・マウンテン・のチッペワ保留地は、フォークナーの描くヨクナパトーファと比較されることが多い。田舎の一か所の共同体を舞台として、複数の作品に同じ登場人物を登場させ、ひとつの小宇宙のような共同体を創作して、効果を上げてい

るからである。)、トニ・モリスン、そしてイギリスでは、ジョン・ダンやバーバラ・ピムの名前を挙げている（108)。メルヴィルの名は挙げていない。

2．アードリック文学におけるユーモアについては、グリアソンを参照。『ラヴ・メディシン』は、ネイティブ・アメリカン文学の第二波ルネッサンスを始めたという歴史的な意義においても、画期的な作品であった。なお、ネイティブ・アメリカン文学の第一波は、N・スコット・ママデイやレスリー・マーモン・シルコウに代表される（Rainwater 272)。

3．この保留地については、その歴史を含め、Maristuen-Rodakowski を参照。

4．カスターとは、ジョージ・アームストロング・カスター中佐のことである。彼は、アメリカ軍騎兵隊の中でも最強の第7騎兵隊の隊長に抜擢され、大平原でのインディアン討伐に当たった。カスターは、大統領候補かというほどに名を上げる。カスター率いる第7騎兵隊は、インディアン戦争でも屈指の知名度のある戦いリトル・ビッグ・ホーンの戦いで、スー族を中心とする先住民に壊滅させられる。なお、『ラヴ・メディシン』における、このネクターの歴史認識は間違いである。「死んだインディアンだけが良いインディアン」のセリフを吐いたとされるのは、南北戦争でも名を上げたが北西部先住民の掃討で最も知られているフィリップ・シェリダン（1831－88年）である。

5．『白鯨』を重視しているだけあり、『ラヴ・メディシン』においては、水のイメジェリーが出てくる（Stookey 43)。たとえば、水を渡るイメージは、登場人物のジューン、リプシャ、ルル、マリーにとって重要である。難産に苦しんだときにマリーは、自分の身体が波に流されて船が岸に着くことを部族語で唱えて、ようやく出産できる。(Stookey 43)

6．ルルにとってもネクターは初恋の相手であった。ただ、ルルはルルで、恋多き人生を送っている。彼女は、三人の男性と結婚をして各々との間に子供を産み、別の三人の恋人との間にも各々子供を産む。加えて、ネクターが相手であろう子供リプシャも産んでいる。

7．Matchie の文献は、参考・引用文献に挙げた文献に載っていた情報である。ただ、この典拠については怪しい。

8．『ラヴ・メディシン』という作品名からは、西洋文化圏であれば、ガエターノ・ドニゼッティ作の惚れ薬を巡る喜劇オペラ『愛の妙薬』を想起する読者も多いであろう。

引用文献

Cox, James H. *Muting White Noise: Native American and European American Novel Traditions*. U of Oklahoma P, 2006.

Dippie, Brian W. *The Vanishing American: White Attitudes and U.S. Indian Policy*. U of Kansas P, 1991.

Erdrich, Louise.

Love Medicine. New and expanded edition. Perennial, 1993.

Gleason, William. " 'Her Laugh an Ace': The Function of Humor in Louise Erdrich's *Love Medicine*." Ed. Hertha D. Sweet Wong. *Louise Erdrich's "Love Medicine": A Casebook*. New York: Oxford UP, 2000, pp. 115 – 35.

Maristuen-Rodakowski, Julie. "The Turtle Mountain Reservation in North Dakota: Its History as Depicted in Louise Erdrich's *Love Medicine* and *The Beat Queen*." Ed. Hertha D. Sweet Wong. *Louise Erdrich's "Love Medicine": A Casebook*. Oxford UP, 2000, pp. 13 – 26.

Matchie, Thomas. "Love Medicine: Plumbing Prairie Roots Through a Novel About the Sea." *Journal of Popular Literature*. 5.1, 1991, pp. 19 – 38.

Melville, Herman. *Moby-Dick; or, The Whale*. Ed. Harrison Hayford, et. al., *The Writings of Herman Melville*. Vol.6. Northwestern UP and the Newberry Library, 1988.

Owens, Louis.

The Sharpest Sight. U of Oklahoma P, 1995.

Rainwater, Catherine. "Louise Erdrich's storied universe." Ed. Joy Porter, et. al., *The Cambridge Companion to Native American Literature*, 2016, pp. 271 – 82.

Ruppert, James. "Fiction: 1968 to the Present." Ed. Joy Porter, et. al., *The Cambridge Companion to Native American Literature*, 2016, pp. 173 – 88.

Stookey, Lorena L. *Louise Erdrich: A Critical Companion*. Greenwood P, 1999.

Wong, Hertha D. Sweet. "Interviews with Louise Erdrich and Michael Dorris." Ed. Hertha D. Sweet Wong. *Louise Erdrich's "Love Medicine": A Casebook*. Oxford UP, 2000, pp. 107 – 12.

市川由季子「典型から原型へ――ルイーズ・アードリックと戦略としての「語り」」西村頼男、喜納育江（編）『ネイティヴ・アメリカンの文学』ミネルヴァ書房、2002 年、22－36 頁。

大島由起子「ルイス・オーエンズの『白鯨』評に学ぶ――先住民ゆえの慧眼と死角と」『福岡大学研究部論集』A: 人文学科学編（アメリカ文化研究）4 巻 9 号 2005 年、15－33 頁。